日本社会における異質な他者の受容と抵抗に関する一考察

－ 大相撲における外国人力士を中心に －

権学俊*・武田 悠希**

本稿は大相撲という日本の伝統的社会における、外国人力士という異質な存在に焦点を当て、現代日本社会がスポーツ労働移民をどのように受容してきたのかを分析することを目的とする。近代に入り、日本では相撲を「国技」とする風潮が強まり、「横綱」の地位が明文化された。「横綱」、「品格」といった創られた伝統による神事性の協調は、「内へのナショナリズム」と「外への日本伝統」を象徴したものであった。戦後大相撲は、海外および日本国内にむけて、日本の伝統を象徴する文化・シンボルとして披露され、多くの外国人力士が来日した。外国人力士が少なかった時代は、日本人力士の優位性は保たれており、外国人力士も日本社会にすんなりと受け入れられた。異質な他者である外国人力士が必死になって日本の国技である大相撲を体得、体現しようとする姿は、日本人が優越性を持って外国人力士を受け入れるという姿勢とつながった。しかし、外国人力士に対する一般的な眼差しは、優越的な視線やその優越性の崩壊に反発するナショナルな抵抗感であった。そして大相撲における「品格」は、「日本人らしさ」を補填するものとして機能した。グローバル化の進む国技大相撲において、日本人の求める「日本人らしい力士」を作りだし、受け入れるための装置として「品格」が作用した。「日本人」と「外国人」を区別する論調は、メディアにおいて殊更に強調された。さらに日本社会内においても、「他者」である外国人力士という存在を受け入れるのに様々な意見が存在し、困惑の色があったことが窺える。

キーワード ： 相撲、伝統、外国人、横綱、品格

Ⅰ．はじめに

現代社会はグローバリゼーションという激変の時代にあり、ヒト・

---

* 立命館大学 産業社会学部 准教授 近現代日本社会論

** 立命館大学 産業社会学部 現代社会学科卒業。現代日本社会専攻

モノ・カネの移動は急速に多様化している。スポーツの中で移動するスポーツ労働移民の存在は、スポーツのグローバル化の一事象であり、スポーツもこのグローバル化の影響を大きく受けているといえる。このスポーツ労働移民の存在は、血統主義や単一民族説、集団主義により同質性の認識が強調されてきた現代日本社会においても確認できる現象である。サッカーの日本代表選手には海外から帰化した選手がメンバーに名を連ね、大相撲の番付には多くの外国人力士の名が記されているように、今日の日本のスポーツはスポーツ労働移民を抜きにして語ることはできない。しかし、グローバル化の進む今日においても、想像の共同体である「国民国家」を形成するナショナルな存在は消滅してはいない。冷戦構造の崩壊、国民国家の力の喪失とグローバル化の進行からもわかるように、予想とは裏腹に、現代社会にはグローバル化とナショナル化が同時進行している。そして、このグローバルなものとナショナルなものとの間で揺らぐ存在が、日本の国技大相撲と、そこで活躍する外国人力士という存在である。

大相撲は日本固有の宗教である「神道」に基づいた神事とされている。さらに、日本人にとって相撲取り・力士は五穀豊穣を願い、日本の土地を守るという「神」に近い存在であるとされている。そしてその最上位である横綱は「神の依り代」と崇められ、多くの特権が与えられるだけでなく、「強さ」と「品格」が求められる。また大相撲は、戦時中は国家的な保護のもとで開催が維持されてきたことや、1925年より幕内優勝力士には天皇杯が下賜されるなど、国家との結びつきも強く、国民からの強い関心を長年に渡り受け続けている。大相撲で活躍する外国人力は、日本語を巧みに操り、入門後は他の日本人力士と衣食住を共にするなど、「日本人」として社会に同化している。しかし、横綱朝青竜と品格問題が近年メディアを賑わせたように、外国人力士が日本人に帰属するかどうかは、非常に難しい問題としてしばしば議論の対象となっている。

相撲に関する先行研究としては、相撲の歴史について歴史学の観点で起源から現代までの変遷を分析した研究や[1)]、相撲の起源をめぐる

---

1) 新田一郎(2010)『相撲の歴史』講談社、pp.1-360。和歌森太郎(2003)『相撲今

様々な議論を日本だけでなく中国など周辺諸国の各競技とも関連付けながら整理した研究が、相撲の歴史性をつかむ研究の代表例としてあげられる[2)]。また、研究の焦点を大相撲に当ててみると、相撲社会の構造的特性について大相撲の部屋制度を社会学的に分析した研究や[3)]、日本の伝統的な経営が今なお息づいている大相撲をマネジメントの視点から分析した研究など、様々な研究がなされている[4)]。しかし、大相撲における外国人力士に焦点を当て、なお大相撲以前の相撲の歴史を考慮したうえで、大相撲の持つ特徴や大相撲が、それを見る人々や社会に何を見せるのかという部分に焦点を当てた研究は不十分である。大相撲にいる外国人力士という切り口から相撲や大相撲を分析する研究は、ほとんどないといってよい。

こで本研究では、日本人としての国民的アイデンティティあるいは国民国家としての日本社会の統合が、内部における「異質な他者」を鏡として映しだされる、特に大相撲という伝統的社会における外国人力士という異質な存在に焦点を当て、現代日本社会がスポーツ労働移民をどのように受容してきたのかを分析する。まず、(1)「創出された伝統」大相撲と大相撲の海外伝播、(2)大相撲における外国人力士という存在について分析を行う。また、(3)1960年代以降、社会的注目度の高かった外国人力士、①高見山(1964～1984、外国人力士初の幕内優勝、パイオニア的存在)、②小錦(1982～1997、外国人力士初の大関、人種差別問題発言と外国人横綱不要論)、③朝青竜(1999～2010、品格問題、引退騒動)に焦点を当て、分析を進めていきたい。外国人力士がどのように描写されているのか、どのようなテーマと関連させて表象されているのか、時代背景と外国人力士とを関連付けた記述はみられるのかといった観点から言説分析を行い、外国人力士に付されたイメージの変遷と、外国人力士が社会に与えた影響を分析す

むかし』隅田川文庫、pp.1- 205.

2) 長谷川明(2002)『相撲の誕生〈定本〉』青弓社、pp.1-258。荒井太郎(2008)『歴史ポケットスポーツ新聞 相撲』大空出版、pp.1- 211.

3) 生沼芳弘(1994)『相撲社会の研究』不昧堂出版、pp.1- 372.

4) 武藤泰明(2012)『大相撲のマネジメント』東洋経済新報社、pp.1-215。中島隆信(2008)『大相撲の経済学』筑摩書房、pp.1- 204.

る。これらを分析することを通じて「国民意識」「ナショナル・アイデンティティ」「ナショナリティ」といったものが日本社会においてどのように存在しているのかを明らかにする。

Ⅱ.「創出された伝統」相撲と大相撲の海外伝播

2-1 近代国民国家と相撲の創出

日本における相撲の起源は、節会相撲や神事相撲のように儀式や神事の際に行われるものであり、神聖なものとされている。日本では『古事記』に国譲りの相撲が記され、日本書紀「垂仁天皇の段」には野見宿禰と当麻蹴速が7年7月7日に、垂仁天皇の前で相撲を取り、勝者の野見宿禰が相撲の始祖として祀られるようになったとされている。さらに、奈良時代には734年7月7日に聖武天皇による天覧相撲が始まり、これを契機に抜出司による相撲節会が始まったとされている5)。また、725年に日本中が凶作に見舞われた際には、聖武天皇が21社の神社に祈願し、翌年は豊作となったことを理由に、御礼として神前において相撲が奉納されたとされ、相撲取りは日本人にとって五穀豊穣を願い、日本の土地を守るという「神」に近い存在とされていた。その後、相撲は武家相撲、勧進相撲など相撲が行われる「場、時、目的」の違いを持ちつつも、発展し、日本中に様々な形で伝播し継承された。

しかし、江戸時代の末期から明治期にかけて、西洋文化が日本に入ってくると、日本の武術は欧米武術へと転換していき、欧米文化の急速な流入がもたらした「脱亜入欧」の社会気運は、日本的な風俗に密着する相撲にも大きく影響を与えた。この相撲の衰退を象徴するものが「相撲無用論」である。「相撲無用論」は近代国民国家を目指

---

5) 相撲の起源に関しては神事や農耕儀礼、貴人の葬祭など諸説あり、そのルーツを国外に求める研究もある。この点に関しては、前掲書 『相撲の誕生〈定本〉』 pp.65-89を参照されたい。

す当時の日本社会において、西洋のものは善(文明)、日本古来のものは悪(野蛮)とする風潮が広まったことに起因する。これに伴い、前近代的なものの排斥が進み、東京府からは「裸体禁止令」が出された。

近代に入ると、日清・日露戦争を契機に日本の伝統的文化見直しの風潮が強まり、相撲の運動文化としての地位が高まり、1909年に両国国技館が建設され、急激に相撲を「国技」とする風潮が強まった。また同年に、大関を上回る地位として「横綱」の地位が明文化された。1909年には行司の服装、1931年には土俵上の屋根に神事的要素の導入に伴う変化が起き、神事性が強まった。1925年には優勝力士に天皇賜杯が贈られるようになり、国技としての大相撲が強調された。つまり、今日の大相撲は興業だった勧進相撲に宗教的な要素が加えられ、再構築されたものと読み解くことができる。また、相撲は盆踊りとともに、日本社会の近代化の過程における西欧との接触に際し、日本の民衆のナショナル・アイデンティティを表象する役割を担ったという点からも、日本を象徴する装置として作用していたと考えられる[6)]。

この点に関して、エリック・ホブズボウムは、近代国民国家で「伝統」と考えられている多くのものが、ごく最近創り出されたものであると指摘している。例えば、祝日、祭典、国旗、国歌、英雄、儀礼に至るまで、「伝統の創出は、数多くの国々で種々の目的のために積極的に行われた」[7)]のである。「創出された伝統」は、「『国家(ネーション)』とそれに結びついた現象、たとえばナショナリズム、民族国家、国家の象徴及びその歴史その他に深く関わっている」[8)]のであり、近代日本においても、国民国家が形成された明治期の転換期にその流れを読み解くことができる。つまり、近代相撲に初めて現れた「天覧試

---

6) 民衆の祝祭文化のなかに深く定着していた相撲は、「日本文化」の構成要素となって社会に定着していくのである。たとえば、1885年、官約移民第一回船で日本を旅立ち、ハワイに上陸した移民たちは、ハワイ島のフラダンス・ショーの返礼に、故郷で親しんだ相撲を現地の人びとに披露している。詳しくは、高津勝(2008)『スポーツ社会学の可能性』創文企画、p.141を参照されたい。

7) エリック・ホブズボウム、テレス・レンジャー編　前川啓二他訳(1992)『創られた伝統』紀伊国屋書店、p.407.

8) 前掲書『創られた伝統』p.25.

合」、「国技館」、「横綱」、「品格」といった創られた伝統による神事性の協調は、「内へのナショナリズム」と「外への日本伝統、倫理主義」を象徴したものであると考えられ、大相撲が持つ意義・役割は単にスポーツとしてのそれ以上であった。

日本の国技として創られた大相撲は、多くのスポーツが打ち切りとなった戦時中もラジオ放送回数を維持し、国家的な保護のもとで隆盛を極め、日本の伝統文化という地位を確固たるものとした。当時の人気力士であった横綱双葉山は、1936年の春場所から1939年の春場所にかけて69連勝を達成し、国民の関心の的となるのと同時に、“無敵日本”のシンボルとして捉えられていた。1938年には満州・華北慰問団にも参加し、この横綱双葉山の連勝は、日本の無謀な侵略を肯定するような軍国主義的な意識を日本国民に浸透させていくうえで、恰好の触媒として作用したのである9)。つまり、戦時中大相撲、またそこで活躍する神の依り代である横綱は、日本国民の心の拠り所ととなり、戦争へ向けた国民意識の統一に政治的に利用されたのである。

2-2 戦後における相撲の海外伝播

今日では、国技大相撲の空間において外国人力士の姿を多く見ることができる。彼らはどのように相撲を知り、なぜ大相撲の世界にやってきたのか。

グローバル化が進むなか、日本の相撲文化は戦後海外にも広く伝わった。ここで相撲の海外伝播に大きな役割を担ったのが大相撲の海外公演、海外巡業である。「海外公演」とは、日本相撲協会主催のもと海外から招待を受けた際に、海外で取組を行うことである。日本の伝統国技を国外で披露することだけでなく、相手国との友好親善や国際文化交流に寄与することが目的とされる側面を持ち、マスメディアではしばしば「裸の親善大使」と表現されることもあり、日本と条約を結んだ国との国交を記念する式典で開催されている。海

9) 坂上康博(2001)『スポーツと政治』山川出版社、pp.34-46.

外公演は1965年7月第一回が行われた以来、14回も開催されている。講演先は旧共産圏、北米、南米、欧州と世界中に広がり、国交正常化や両国間の記念事業の際に海外公演としての相撲が行われている[10)]。また、海外諸国からの公演依頼により開催されていることからも、大相撲は諸外国にとって、日本との外交を記念する際に「日本らしいもの」という文化的装置として活用されていたと推測することができる。

もう一つ大相撲の海外伝播に大きな役割を担っているのが「海外巡業」である。海外巡業は、日本相撲協会とは別に主催者となる地元の興行主がおり、海外の大相撲ファン拡大と収益の獲得を目的にしている。高見山がハワイ巡業の際に、高砂親方からスカウトされたように、海外巡業は海外の有望な力士を発掘する場の役割も担っている。注目すべき点は、第1回から第8回までの海外巡業は、ハワイにて2年周期で開催されてきたという点である[11)]。この定期開催の背景には、高見山を足掛かりとしたハワイにおける大相撲の力士のスカウトとともに、ハワイにおける日系人コミュニティの存在が大きく関与している。明治以来国策として奨励されたハワイ・南米などへの移民によって形成された日系人社会においては、故郷の日本文化が彼らのアイデンティティ形成を維持するものとして保存継承されており、相撲もまた彼らの間に伝えられていた歴史を持つことから、日系社会において相撲が果たすナショナルな役割は大きい。ハワイ同様、日系人コミュニティの存在するブラジルで開催された1990年のブラジル海外公演に関しては、「盛況だった大相撲ブラジル公演　日系人「夢のよう」」[12)]というタイトルで報道されている。この報道から、当時の大相撲海外公演が日系社会にどのように受容されているのかが把握できる。相撲の海外公演・海外巡業は、日本の伝統

10）この点については、日本相撲協会HP http://www.sumo.or.jp/ 参照.

11）海外巡業はアメリカ以外にもスペイン、ドイツ、台湾、モンゴル、香港等で第15回開催されている。この点については、日本相撲協会HP http://www.sumo.or.jp/ 参照.

12）「盛況だった大相撲ブラジル公演　日系人「夢のよう」(時時刻刻)」『朝日新聞』朝刊 1990年6月12日付.

文化を海外に発信するための一つのツール、あるいは日本を象徴するシンボルとして活用されたのである。

この他にも、相撲の海外伝播において大きな役割を担ったものの一つに、アマチュア相撲の世界的普及と世界相撲選手権大会、そしてワールドゲームズがある。世界相撲選手権大会は1992年に創設された国際相撲連盟が毎年開催するアマチュア相撲の世界大会である。このアマチュア相撲は、国際相撲連盟が相撲をオリンピック種目にしようと取り組んでいることからも明らかなように、相撲の普及活動を行っている。同様に、アマチュア相撲の世界大会として、2005年より相撲が正式種目となったワールドゲームズが挙げられる。また、メディアの発達に伴い、海外でも日本の大相撲が観戦できるようになった。大相撲はNHKにより生放送で放送されており、NHKワールド・プレミアムを通じて、幕内の取り組みは海外でも観戦することができるようになっている。北米ではケーブルのスポーツチャンネルであるESPNで世界中に放送されている。今や大相撲はメディアを通じて日本の「外交資源」といえるまでに普及しているのである[13)]。

Ⅲ. 大相撲における外国人力士という存在

3-1 増え続ける「外国人」力士の歴史と現状

外国人力士の第一号は1915年に初土俵を踏んだ千田川(宮城野部屋・米国)である。その後、戦前にはアメリカやブラジルの日系人や中国出身の力士が角界入りするが、成績は振るわなかった。戦後となり、日本で成功した第一号の力士がハワイ出身の高見山である。戦後初の幕内力士高見山は、日本社会に好意的に受け入れられた。この高見山以降も多くの外国人力士が大相撲の世界に挑戦してきたが、彼ら

13)「(社説)大相撲 多国籍化は面白い」『朝日新聞』朝刊 2005年9月26日付。

は日本社会に好意的に受け入れられていた。その後、1970年代から80年代にはアメリカ出身の高見山・小錦らが、90年代に入ってからは旭鷲山・旭天鵬らモンゴル勢とブラジル出身力士が、そして2000年代には韓国や東欧諸国出身の力士が活躍するなど、外国人力士の数が増加するのと同時に、出身地も多様化している。2012年4月現在、幕内から序の口までに含まれる外国人力士の出身地と人数は、11か国45名(全力士数647名)である[14)]。

しかし、1990年代には「外国人横綱不要論」も出されるなど外国人力士を批判する声もあった。そんな中、なぜ大相撲に外国人力士は誕生し、今なお増え続けているのだろうか。この問題に対して、大きく分けて6つの要因が考えられる。

第一の要因として、海外公演、海外巡業、メディアを通じた大相撲の海外伝播がある。高砂親方がハワイ巡業の際に高見山をスカウトしたことや、角界入りした高見山が後に角界入りする小錦と曙をスカウトし、ハワイ出身力士の一大勢力が大相撲内で形成されたことからもこの点は明らかである。黒海はテレビを通じて大相撲の存在を知り、初のヨーロッパ出身の関取となった[15)]。

第二の要因として、日本相撲連盟を中心とするアマチュア相撲の国際化がある。1992年に始まった世界相撲選手権大会で高成績を収めた力士が大相撲界入りを果たしており、ロシア出身の阿覧などはこの世界相撲選手権大会出身力士である。また、東京にある国際相撲連盟を通じて、黒海や把瑠都といったヨーロッパ出身の力士が来日するケースもある[16)]。

第三の要因として、日本社会の成長に伴う、移民受け入れ国としての日本の成熟がある。大相撲にやってくる外国人力士の中には、高見

---

14) この点については、外務省HP http://www.mofa.go.jp/mofaj/ 参照.

15) 「ロシア語舞う支度部屋『国技を世界へ』押し通す」『朝日新聞』夕刊2006年9月29日.

16) 「ロシア語舞う支度部屋『国技を世界へ』押し通す」『朝日新聞』夕刊2006年9月29日には、ヨーロッパ出身力士たちの入門の経緯が描かれ、「史上初の金髪関取となった把瑠都は柔道の選手だったが、地元の相撲大会に出ていてさそわれ、国際相撲連盟を頼って来日。田中が日大の道場で3か月預かったあと、日大OBで元小結浜ノ嶋の尾上圭志の内弟子になる」と記され、国際相撲連盟が大相撲協会入りへの窓口の役割を担っていることが分る。

山が「五年分の衣食住を保証する」、小錦が「家計への圧迫を軽減できる」など経済的理由で入門を決めたという事例がある[17)]。2000年以降、急速に大相撲界に増え続けているモンゴル出身力士の場合は、その背景に経済的理由がある。大相撲における最大外国人勢力となっているモンゴルでは、日本の大相撲に入幕し、成功を収めることが一つのステータスとなっており、特に横綱は国民の中で、「成功者」「英雄」的な存在となっている[18)]。

第四の要因として、日本におけるライフスタイルや意識変化による将来の力士候補不足(若者の相撲離れ)がある。大相撲の新弟子検査の合格者数は近年減少の一途をたどっている。その原因としては、少子化と日本の若者への力士という職業に対する魅力の低下が考えられる。日本人の若者にとって、相撲力士はそれほどまで魅力的なものではなくなった。

第五の要因として、相撲部屋の私有制度の確立に伴う、稼ぎ頭となる有望な力士を海外に求める親方の出現がある。小錦のデビュー以降、6年足らずで24人もの外国人が日本の土を踏んでいることからも、親方が新弟子の獲得に躍起になっていたことが窺える[19)]。

第六の要因として、強い力士、話題性のある力士の獲得と大相撲の興業性の重視に基づく大相撲独自のスカウティング網の拡大がある。グローバル化の進む今日、元来国内に限られていた大相撲の新弟子供給源は海外にまで広がっているといえる。

3-2 外国人力士に対する「日本相撲協会」の反応と受け入れ姿勢

1950年初場所に当時の3横綱(東富士、照国、羽黒山)が揃って3日

---

17) 高見山大五郎・小錦八十吉・ロバート・ホワティング(1984) 「ジェシーとサリー」『Number』6月号、pp.18 -23.

18) 前掲書『相撲今むかし』pp.23-26。「「英雄」なき春モンゴル失望」『朝日新聞』朝刊 2010年3月20日.

19) 前掲書『大相撲の経済学』pp.78-85。前掲書『歴史ポケットスポーツ新聞 相撲』pp.45-53.

目までに休場したことをきっかけに「横綱も二場所連続負け越し、または休場で大関陥落とする」という「横綱格下げ論」が協会から発表された。しかし、これに対して世論は猛烈に反発した。「横綱格下げ問題は愚劣である。横綱はあくまで相撲の最高の称号で選手権とは同一にならぬ。横綱の格下げはすなわち相撲の格下げであり…相撲の堕落というべきである」[20]といった意見が協会に多数寄せられた。これによって、新たに協会が設置した諮問機関が「横綱審議委員会」である。そもそも横綱とは、大相撲の力士の番付における最高位の称号である。横綱には降格がなく、現役引退によってのみその地位から降りる。現在の大相撲においては、横綱はすべての力士を代表する存在であると同時に、神の依り代の証とされている。そのため、横綱には様々な特権が与えられている[21]。

では、日本相撲協会、横綱審議委員会はこれまで日本の国技大相撲を伝承していくために、外国人力士に対してどのような制限を加えてきたのだろうか。日本社会では、1992年に横綱審議委員を務めていた児島襄が「外国人横綱不要論」を寄稿し物議を醸したことを皮切りに、当時日本相撲協会の理事長を務めていた出羽海も、1998年まで続く外国人力士の新弟子の受け入れ自粛を決め、年寄名跡の襲名は「日本」国籍を持ったものに限るという制限を行った。自粛の理由は、外国人力士の人数が増えたためではなく、小錦の横綱昇進に関わる人種差別問題、モンゴル人力士脱走帰国問題に起因する。また自粛当時は外国人力士を擁する部屋は少数派であったため、自粛はすべての部屋を対象としたものではなく、外国人力士を「とりすぎる」一部の部屋に対する禁止措置であった[22]。また、外国人力士人数制限に関しても2002年までは1部屋2人以内、全体で40人以内の規定であったの

20）『毎日新聞』朝刊 1950年1月29日付.

21）横綱の特権は、(1)どんなに成績が悪くても、休場しても降格がない、(2)通例として15人の付き人がつく、(3)現役力士の代表として日本相撲協会の評議員を務めることができ、役員選出などにおいて投票権を行使できる(日本国籍の場合)、(4)年寄名跡を持たなくても現役引退後5年間は四股名のままで年寄として協会に残ることができるなどがある。

22）前掲書『相撲社会の研究』pp.34-48.

が、2002年から40人枠が撤廃され、1部屋1人(変更時点で1部屋2人いた場合は可)に変更された。2010年2月からは、外国人力士枠が外国出身力士枠に変更され、外国出身力士は帰化者を含め1部屋1人のみに制限された。つまり、この外国人力士枠は、大相撲におけるナショナルなものを維持するための抵抗として解釈でき、日本相撲協会は大相撲の神事性、伝統、精神文化を主張し、外国人に対して排他的な姿勢を示してきた。

日馬富士(当時大関)は2009年夏場所にて優勝を飾ったが、11日目の取り組みに対して横綱審議委員会は立ち合いの変化ばかり糾弾し、次の秋場所で14勝以上の優勝と相撲内容の充実を横綱昇進の条件とした。内館牧子委員は、報道陣に「上を目指す人間なら、あれはだめ」と発言し、鶴田委員長も「真正面からぶつからないと」と注文をつけたのである[23]。逆に、日本人大関には、「次の場所は優勝せずとも、勝利数次第では昇進の話が出てくる」など、外国人力士と日本人力士との間で、横綱昇進に関する反応に違いがある。2004年には日本人大関魁皇の横綱昇進基準が、横綱審議委員会、審判部、理事長の間でさえも異なり、昇格基準のあいまいさが露呈された[24]。日本相撲協会、横綱審議員会は、外国人力士は国技大相撲を継承するには適した存在ではないとする傾向が強い。また、外国人横綱誕生以降、外国人に負けない日本人横綱の誕生を希求する機運があり、その影響で横綱昇進をかける日本人力士と外国人力士への対応に違いが生まれているケースまで存在している。1925年に誕生した日本相撲協会は、戦前から皇室とも深い関係を持っており、閉鎖性、保守性、政治性の極めて高い組織であると評価することができる。

---

23)『朝日新聞』朝刊2009年5月26日付.

24)「横審「諮問なかった」魁皇の昇進見送り根拠あいまい」『朝日新聞』朝刊2004年11月30日付.

Ⅳ. 外国人力士に対する日本人化・同化と抵抗の隙間

4-1 外国人力士高見山[25]の登場と初優勝-1960年代から70年代まで

では、外国人力士は日本社会からどのように評価・描写されてきたのか。1960年代前半の大相撲界では、敗戦直後の復興から高度経済成長期の相撲黄金時代を支え、1961年に揃って横綱に昇格した柏戸と大鵬が、「柏鵬(はくほう)時代」と言われる黄金時代を築いた。特に大鵬は、6連覇2度を含む優勝32回、45連勝などを記録し、当時の子どもの好きなものを並べた「巨人・大鵬・卵焼き」という流行語からも分るように、一時代を代表する横綱であった。しかしながら、60年代後半の大相撲は人気に陰りが見られ、その当時大相撲の世界に飛び込んだハワイ出身の「高見山」は大相撲人気を活性化させる期待の存在として描かれている[26]。この当時日本社会、大相撲界にとって異質な他者である外国人力士・高見山ではあったが、大相撲において日本人力士の方が外国人力士よりも強く、圧倒的多数を占める環境であり、日本人力士の優位性は保たれており、異質な存在である外国人力士もすんなりと受け入れられた[27]。高見山が幕内に昇進した際の「目標は三役(横綱、大関、関脇)」という高見山の発言に対しても肯定的な論調であったことからも、外国人力士に対する反発は強くなかった[28]。

1964年に初土俵を踏み、68年に入幕を果たした高見山は、その直

---

25) 戦後大相撲における外国人力士のパイオニア的存在であった高見山(1964年初場所～1984年引退)は、ハワイ出身の力士である。1964年2月に師匠高砂(元横綱前田山)に5年間衣食住を保障するとスカウトされ、1968年に入幕後、1972年の7月場所において外国人力士初の幕内優勝を飾る。1980年に日本国籍を取得し渡辺大五郎となり、1984年の引退後は、東関親方を名乗り、弟弟子になる小錦を自らスカウトし、自分の弟子である曙を横綱まで育てるなど、大相撲の国際化にも大きく貢献した。

26)「新入幕ただ一人　異色の高見山　目標は三役」『朝日新聞』夕刊　1968年1月6日付.

27)「新弟子検査に軽くパス　ジェシー君」『朝日新聞』朝刊　1964年3月5日付.

28)「新入幕ただ一人　異色の高見山　目標は三役」『朝日新聞』夕刊　1968年1月6日付.

後に横綱に勝利するなど金星を挙げ、69年11月場所には小結までに昇格した。そして、その後72年7月場所、13勝2敗の成績を収め外国人力士として初優勝を飾った。翌日の朝日新聞には、「オオマイペース高見山　まさに国技館育ち　胸張ってきく君が代」「それにつけても…反省だらけの名古屋場所」「賜杯さらった"ジェシー台風"この姿を先代親方に来日8年実った根性」[29]といった見出しが躍り、日本人力士が外国人力士に負け、優勝を逃すことについて批判する記事が掲載されていた。このことからも、外国人力士である高見山の優勝をきっかけに、外国人力士は日本人力士の比較の対象となり、国技大相撲において日本人は優位性を保たなければならないという主張も生まれた。また、読売新聞では、「"外人"高見山が優勝」「ジェシー苦節9年いま実る」「国技に深いツメ跡 4場所連続の初優勝」「心は立派な日本人 ミソ汁、タクアン、碁・将棋・花札」[30]という見出しで記事が書かれ、その内容は外国人力士の高見山の根性、日本人らしさを強調した内容であった。更には、日本人らしい外国人力士の高見山が、他のプロ・スポーツと比して「国家」との結びつきが強い大相撲において優勝したという言説により「日本人らしい者が国技において勝つ」というイメージがメディアを通じて再生産されたと考えられる。以下の記事でもそれは確認できる

> ジェシーこと高見山の優勝説が濃厚になってきたとき、千秋楽におこなわれる優勝力士の表彰式は「君が代」ではなく、アメリカの国歌「星条旗」が鳴り響くだろうとのうわさが広まった。ところが、どうだろう。当の高見山はこのことを聞いてはっきりといった。「もちろん君が代ね、ぼくは大相撲の力士だから…。もし優勝できたら、表彰式のとき心のなかで日本の国歌をハミングします。」[31]

---

29)『朝日新聞』朝刊 1972年7月17日付.

30)『読売新聞』朝刊 1972年7月17日付.

31)「オオマイペース高見山 まさに国技館育ち 胸張ってきく君が代」『朝日新聞』朝刊 1972年7月17日付.

この高見山からのコメントからは、高見山自身が「日本人らしく」振舞っていた姿勢がうかがえ、大相撲の世界で生きていくために、自ら日本人への同化とも取れる姿勢・行動をとっている。

また、以下の記事からは、日本人らしいガッツと大和魂で日本流になろうと頑張り、優勝した高見山を優越的な視点で評価する姿勢を把握できる。

> 高見山の悲願は実った。しぶとい旭国を破って13勝2敗の堂々たる優勝。190センチ、163キロの巨体の胸を張って「君が代」を聞くその姿は国技大相撲で育った"関取"そのものだった。今日の高見山を育てた先代高砂親方の口癖は「ジェシーほど関取らしいやつはいない。日本人らしいやつはいない」(中略)言葉も食物も気候も、その他すべての点で異る。日本のそれも国技大相撲へ飛込んだのだから。だが、高見山はがんばった。「ガッツ(根性)」をモットーにしてがんばった。三十九年春場所に初土俵を踏んだ同期生は四十六人。それが今では幕内一人(黒姫山)十両一人、幕下以下五人の計七人に減っている。いかに高見山が日本流にいう大和魂を持っていたかが分かるだろう[32]。

つまり、優勝した高見山を報道する記事では、大相撲という伝統的な世界の中で育て上げられ、日本人らしくあり続けた高見山が優勝したというストーリーが作られ、そこには暗に日本人化を善とする姿勢が存在している。当時の高見山に対する日本社会からの視線には、海外の人々(アメリカ出身の高見山)が自国の伝統的な文化(日本の国技大相撲)を一生懸命に習得しているということに対する優越性と自民族中心的な感情とともに、日本の伝統文化が外国人に認知されたことの喜びと読み解くことも可能である。事実、高見山の登場以降、新聞記事には「高見山に続け」、「ガイジン力士奮戦中　第二の高見山をめざして…」、「高見山に続くのは？外人力士に厚い関取の壁」[33]といった「第二の高見山」の登場を求める記事が存在すること

---

32)「心は立派な日本人」『読売新聞』朝刊1972年7月17日付.

33)「高見山に続け」『読売新聞』夕刊　1968年10月10日付。「ガイジン力士奮戦中」『朝

からも、必死になって日本の文化を習得しようとする外国人に対して、日本人が評価するという構図が成立していたことがうかがえる。これは1970年代という自動車や家電などの日本製品が世界で認められていく過程において、「世界に認められた日本の技術力」や「メイド・イン・ジャパンの誉れ」が叫ばれる中、伝統的な大相撲の世界においても、アメリカ出身の力士が自分たち日本のルールに従い、その中で努力し、優勝したというストーリーには、自文化の優越性、自民族中心的な考え方と伝統が理解されたことへの「喜び」が含まれていたと考えられる。

4-2 待望の新幕内外国人力士から“黒船”小錦[34]へ－1980年代

高見山と同じくハワイ出身の力士小錦が、1984年名古屋場所で入幕を果たすことで、1970年代から続いた第二の高見山は育たないというジンクスを打破した。これにより、小錦は待望の新外国人幕内力士として日本社会に迎え入れられた。名古屋場所3日目には、「小錦パワーまるでブルドーザー」[35]という記事にて、高見山が土俵から姿を消した今場所、一抹の寂しさがあったが、この日の一番を見た限り、小錦は高見山を超える力士になるのではないか、そんな感じを抱かせたといった、高山と小錦を比較した内容が掲載された。小錦の相撲を評価する内容が見受けられることからも、そこには好意的に期待の存在として小錦が受け入れられていた様子がうかがえる。

小錦がマスコミの注目を浴びたのは1984年の秋場所である。幕内

日新聞』夕刊 1978年1月14日付。「高見山に続くのは？」『朝日新聞』夕刊 1982年7月17日付.

34) 小錦(1982年初場所～1997年引退)はハワイ出身で、高見山にスカウトされ角界入りした。84年の7月場所で入幕を果たし、入幕2場所目で12勝3敗という好成績を収め一躍マスコミの注目を浴びる。87年に外国出身力士としては史上初の大関となった。89年11月場所に幕内初優勝した。1992年に当時の横綱審議員会の委員が唱えた「外国人横綱不要論」、それに関連する人種差別発言がマスコミで大きく取り上げられた。1994年に日本に帰化を果たした。

35) 「小錦パワーまるでブルドーザー」『朝日新聞』朝刊 1984年7月9日付.

入幕後2場所目で2横綱1大関を倒し、12勝3敗の好成績をあげた際である。当時の新聞記事には、そのことが「小錦旋風、新時代へ夢つなぐ」[36]や「黒船小錦」[37]とセンセーショナルに描かれている。小錦は、日本文化を破壊するもの(侵略者＝黒船)と関連して描かれ、大相撲におけるヒールヒーローの役割を付与された。小錦の活躍は「小錦旋風(天声人語)」[38]において、外国からやってきて二年余りの若者に横綱、大関がなぎ倒されて、大相撲の権威も土俵際に立たされたと記されたことからも、小錦という外国人力士の登場が大相撲に大きな衝撃を与えたことが推察できる。また、読者からは、「小錦の存在は閉鎖的な社会でぬるま湯につかっていた力士、協会への良い薬である」といった意見や、「相撲界の中には、小錦の活躍に拍手を送れない閉鎖性が存在することを知って心が痛んだ」、「外人に優勝されて困るのなら、なんで入門を認めたのか」、「駆け出しの、しかも外人にやすやすと白星を献上するとは。国技などと言っても、体がバカでかく、バカ力があれば勝てるのだから、もはやそうといえる代物ではない」[39]といった投稿が寄せられており、閉鎖的な日本社会、大相撲界を批判する論調とともに、日本の国技大相撲の衰退を危惧する声もあがった。その後、小錦はしばしば「小柄で、技術があり、洗礼されている日本人力士VS大柄で、パワーまかせで、洗礼されていない外国人力士」という構図の中で描かれるようになった[40]。そして小錦が力をつけ、番付を上げていくに伴い、小錦に対する評価とメディアにおける言説にも変化が現れた。

入幕当初は期待の新幕内外国人力士として受け入れられていた小錦であったが、入幕後2場所目にて2横綱1大関を撃破したことを境に、その存在は、日本相撲協会にとって脅威の存在へと変わっていた。これは、大相撲における日本人力士の優位性が崩れることに対する日本人側からの恐れであった。横綱という神の依り代をも圧倒する外国人

36)「小錦旋風、新時代へ夢つなぐ」『読売新聞』朝刊 1984年9月24日付.
37)「角界の"眠り"破る　黒船小錦」『読売新聞』夕刊 1984年9月25日付.
38)「小錦旋風(天声人語)」『朝日新聞』朝刊 1984年9月24日付.
39)『読売新聞』朝刊 1984年10月1日付.
40)「外人パワー、国技館でも」『朝日新聞』夕刊 1987年5月22日付.

力士小錦はあまりにも強すぎ、日本人の優位性を覆す存在として脅威の存在となったのである。また、横綱が外国人力士に簡単に敗れるということは大相撲の文化的、伝統的側面からも、興業の面からみても問題であった。

その後、小錦は1987年5月に外国人として初めて大関に昇進する。この際にメディアでは、大関という大相撲の看板力士になった小錦を「日本人らしい力士」として受け入れている[41]。また、「相撲はけんかだ」「こわいものはない」と豪語して非難されたことがあった小錦が、次第に「相撲の厳しさ、相撲の奥深さ」を口にするようになり、相撲社会の文化とサモア・ハワイの文化の激しい摩擦が続く中で、小錦なりの同化が進んだと述べられている[42]。つまり、小錦は日本社会、大相撲の世界にふさわしい日本人に同化するなかで大関となったとされ、メディアはその小錦を美化したのだと考えられる。小錦に関する記事からは大相撲において、観客たちが暗に外国人力士の日本人化、同化に期待し、その努力する姿に感銘を受けながら外国人力士を受容している姿が見受けられる。そこには大相撲の閉鎖性、伝統を意識し、時には批判しながらも、現代の日本人でさえも文化の変容に伴い、理解することが難しい大相撲における伝統、しきたり、品格をより異質な他者である外国人力士が日本人らしい根性、努力のもとで昇進し、優勝することを評価するという姿が内包されている[43]。この姿勢には、自民族の文化である大相撲を、他者である外国人力士が必死になって会得していくことへの優越的な視座が内包されている。

---

41)「新時代告げた同郷決戦」『朝日新聞』朝刊 1987年5月25日付.

42)「小錦の同化(天声人語)」『朝日新聞』朝刊 1987年5月28日付.

43)「涙一転、光る笑み「次は綱」の声も 初V小錦」『朝日新聞』朝刊 1989年11月27日付。「小錦八十吉の涙(社説)」『朝日新聞』朝刊 1989年11月27日付。「小錦さん優勝おめでとう!(声)」『朝日新聞』朝刊1989年11月29日付.

Ⅴ.「外国人横綱不要論」浮上と日本社会から要求される「品格」

5-1 異質な外国人力士に抵抗感を示す日本社会の特殊性-1990年代

1980年代後半から1990年代にかけて、大相撲における外国人力士に対する様々な制限が出され、日本社会の偏狭なナショナリズムの一端とも取れる「外国人横綱不要論」が当時の横綱審議委員会委員(1987～1999)の歴史作家・児島襄より出された。こんな中、小錦は自分を取り巻く当時の周囲の環境、心境を次のように表現している。

> 日本人が相撲の世界に入るのと同じ条件で、ぼくも入り、皆と同じ待遇のもとで同じ稽古を積んできたのに、「ガイジンには優勝してほしくない」「力まかせの相撲をとる奴に横綱の資格はない」いろんな「アンチ小錦」の声が聞こえてくる。(中略)　天皇杯に近づくにたびに「ストップ・ザ・小錦」運動が盛り上がりを見せるんだ。「相撲の世界にガイジンを入れるべきじゃない」「金髪のチョンマゲが登場したら、どうするのか」横綱審議会委員長の高橋義孝さんも、暗に僕を指してひどいことをいっぱい発言している。(中略)「岡本綾子が全米一の賞金王になってもアメリカ人は褒めこそすれ貶しはしない」他の国々では、その国の文化に近づこうと努力する外国人は歓迎されるのに、日本人はおかしいよ44)。

この記事からは、外国人力士という「他者」である小錦に対する日本社会内にある強い抵抗の動きを読み解くことができる。また、当時アメリカで活躍していた女子ゴルファーの岡本綾子と自分の置かれた関係を対比させ、海外で頑張る外国人スポーツ選手の社会への受け入れられ方から、異質なものに対して抵抗感を示す日本社会の特殊性や同質性を疑問視する姿勢がうかがえる。つまり、小錦は土俵の外でも日

---

44) 小錦八十吉(力士)(1988)「外人が横綱になってどこが悪い人種差別、ワラ人形。土俵の外に強敵がいた」『文芸春秋』4月号、pp.321-322.

本社会という敵と戦っていたのである。これに対して、横綱審議委員会委員・児島襄は、相撲には外国人横綱は「不要」であるという主張を展開した。

> 相撲だけが「国産」であり、古来という表現そのままに、社会の変化をのりこえて日本国民が守り続けてきたものである。プロ・スポーツであるだけに、外国産のものと類似する側面を持つが、相撲は日本の道徳観、価値観の基礎である「守礼」を本義とする独自の性格をもつ。(中略)相撲は神事や皇室と深い関係を保つことを含めて、日本国民の精神文化の一部であり、だからこそ生きのびてきたといえよう45)。

児島の主張は、相撲は他のプロ・スポーツとは異なり、日本におけるエスニシティ構築の一助を担う精神文化であるため、その役割を外国人力士は全うできないと考えた。また、横綱らしい横綱である栃錦、大鵬、北の湖、千代の富士などを列挙し、横綱の「品格」を強調した46)。児島は「品格」という抽象的な基準をキーワードに、外国人力士の流入に伴い、大相撲が日本の国技で伝統、精神文化とされるナショナルな大相撲と、グローバル化の進むスポーツとしてのSUMOとの間で揺らいでいるとした。同時に大相撲が担う精神文化を尊重し、その文化が外国人力士には理解しがたいために、外国人力士を大相撲から排除するべきだとしたのである。当時横綱への昇進が議論されていた小錦がこれを人種差別だと主張したことで、海外のメディアも注目する一大議論へと発展したのである。

同様に、「外国人横綱不要論」は、日本経済新聞社のある記者が、小錦が春場所で優勝したにもかかわらず横綱に昇進することができなかった理由を小錦に尋ねたところ、小錦から「厳密に言えば、これは人種差別だよ。金髪や黒人だったらどうなのか。今回なれなかった理由は一つしかない。それは僕が日本人じゃないからだ。」47)という返

---

45) 児島襄(1992)「『外国人横綱』はいらない」『文芸春秋』4月号、p.373.
46) 前掲書「『外国人横綱』はいらない」p.376.
47)『日本経済新聞』夕刊 1992年4月20日付.

答を受けたという記事が掲載されたことで、この議論は更に膨れ上がった。また、その2日後ニューヨーク・タイムズ紙の電話インタビューで「もし自分が日本人だったなら、すでに横綱になっていただろう」[48]という発言をしたという報道により、更なる過熱を見せ、一躍日本全体を巻き込む社会的問題へと発展した。これを皮切りに、海外からは相撲界に留まらず日本に対する様々な批判を受けたのである[49]。国会でも小錦のこの発言は議題に上がり、日本社会全体の問題として、海外では大きくクローズアップされたのである[50]。

当時の日本相撲協会理事長の出羽海は、「今回の議論により、力士はただ強ければいいというものではないことを改めて国民に考えてもらういい機会になったと思う」と意見を述べ、「大相撲が継承する日本文化の美しい面が相撲には残されていて、それを守っていこうという態度が力士には求められている」と主張した[51]。ここで注目したい点は、出羽海が相撲とは「日本人の美意識の完成した姿」「礼節もない、廻しも汚されているとなったらいかに敢闘精神に溢れた相撲をとっているからといって、日本人がそれを愛するとは思えない」[52]と述べている点である。そこには、相撲という文化は、日本的なものであるということ、日本人の考え方を中心に相撲という文化が継承されているということが強調されており、ただ強いだけでは不十分であるとみなされたのである。

それではなぜ、「外国人横綱不要論」などの外国人に対して排外的な

48）しかし小錦は自らの自伝(1998)の中で、日本経済新聞の取材に対して上記のような発言はしていない、またニューヨーク・タイムズの取材に関しては、シャワーを浴びている間にハワイ出身の付き人が勝手に答えたものであるとした。

49）外国人横綱不要論に反応した米紙は「閉鎖市場イメージの日本が直面した開放度テスト」「人種差別的な排他性」「品格の定義がない以上、意味がないと」といった記事が紙面をにぎわした。「小錦が衝突した文化(社説)」『朝日新聞』朝刊　1992年4月24日付.

50）1992年4月23日外務委員会、1994年5月12日文教委員会において小錦関連の発言がなされた。

51）出羽海智敬(1992)「相撲には相撲の流儀がある 日本の伝統を守るのに誰に遠慮がいるのか」『文芸春秋』8月号、pp.298-306.

52）前掲書「相撲には相撲の流儀がある 日本の伝統を守るのに誰に遠慮がいるのか」pp.298-306.

意見が90年代に出されたのか。その要因の第一は、日本相撲協会や大相撲を神事、伝統的な国技として捉えている人々からの、大相撲における日本人の優位性が保たれなくなったことへの抵抗であった。外国人力士の入幕以降、当初は日本人力士が優位性を保っていた。しかし90年代に入り、小錦を筆頭に外国人力士が力をつけ始め、横綱という絶対的な存在に近づいてきたことにより、日本人力士がその優位性を保つことが難しくなった。つまり、小錦の出現により人々は初めて国技の中に潜む暗黙の序列意識に気が付き、自文化という慣れ親しんだ空間から、異文化との境界線という緊張感を持つ空間のなかに放り出され、抵抗感を示したのである。

第二の要因としては、グローバル化の加速によるナショナリズム言説の隆盛が考えられる。80年代後半から90年代にかけての日本社会は、日米貿易摩擦など、経済領域において諸外国との間で軋轢を抱えていた。そのなかで、90年代は日本人論にとって「失われた10年」であったとしても、より直観的なナショナリズム言説が百花繚乱と現れた10年ともいえる。同様にグローバル化の動きの中で、日本という「自己」は、オリエンタリズムの二重の呪縛の中で「アイデンティティ探し」を強いられ翻弄し、1990年代において「日本であること」や「日本人であること」が広がり、ナショナリズムの大衆化が進んだのである[53]。この点において、近代に入り「創られた伝統」が強調されてきた大相撲は、日本人にナショナルなものを見せる存在として作用し、1990年代においてナショナルな言説が強調されたのである。また、小錦の横綱昇進の話が出た際、個人的要因としては小錦の相撲のスタイルが力任せな一面があったこと、相撲的要因としては日本人横綱が空位であり、小錦が昇進した場合外国人横綱の一人だけになってしまう状況であったこと、社会的要因としては日米貿易摩擦が世間で騒がれ、ナショナルなものが希求される状況であったこともあり、小錦はメディアにおいて「日米文化摩擦」として報道されたのである。

53）阿部潔(2001)『彷徨えるナショナリズム』世界思想社、pp.125-136.

5-2 朝青竜[54]に対する言説の変化と「品格」問題 - 2000年代

1990年代に外国人力士としてハワイ出身の曙や武蔵丸が横綱になり、2000年代に入ると朝青竜や白鵬が横綱となるなかで、多くのモンゴル出身力士が角界に進出した。しかし、その一方で2000年代に入ると、協会やマスメディアから外国人力士たちの「品格」を問う声が急激に増加した。とりわけ、その矛先は技量だけでなく品格の問われる「横綱」に向けられた。2003年の初場所に横綱へ昇進した朝青竜が、横綱としての品格が問われ続け、最終的に現役引退に追い込まれた背景には、相撲の歴史的背景と、日本人の持つ横綱という一種の特別な存在(神の依り代)へのイメージに外国人横綱が当てはまらなかったことが考えられる。そして、この大相撲における過度な「品格」論調は、マスメディアにおいて更に強調された。マスメディアは大相撲における「国技」「神事」「横綱の品格」を殊更に強調し、朝青竜を一斉に批判したのである。

朝青竜は入門直後、期待のモンゴル人力士として大相撲の世界に受け入れられた[55]。その後も順調に番付を上げる朝青竜は、当初日本社会に寛容に受け入れられていったが[56]、大関、横綱へと昇進すると、朝青竜の言動や取組時の作法について、朝青竜の品格に関連する

---

54) 朝青竜(1999年初場所～2010年引退)はモンゴル出身の力士である。モンゴル相撲(ナーダム)の相撲少年の部で15歳の時に優勝、1997年に日本の明徳義塾高校に相撲留学し、1999年に角界入りした。2003年に横綱に昇進した。2004年11月場所からの7場所連続優勝や、2005年には年間6場所完全優勝という好成績を収め「平成の大横綱」と呼ばれた。しかし、2007年にけが等を理由に夏巡業の不参加の際に、モンゴルでチャリティーのサッカーをしていたことが発覚し、11月場所千秋楽までの謹慎処分を受ける。また、歯に衣着せぬ言動や、巡業を休み母国でサッカーをしていた仮病騒動、取組後のガッツポーズや飲酒に関連した暴行問題を通じて、横綱の品格を問われ続け引退した。

55) 「めざすは第二の旭鷲山　モンゴルの英才、ダワガドルジ君デビュー」『朝日新聞』朝刊 1999年1月25日付.

56) 「めざせ関取　モンゴルから「旭天鵬追え」今年も3人初土俵」『朝日新聞』朝刊 2000年1月29日付。「モンゴル出身朝青竜、歴代5位のスピード出世 大相撲秋場所番付」『朝日新聞』朝刊 2000年8月22日付.

記事が増え、心・技・体の心の部分が満足ではないというバッシングが起こり、横綱審議委員会を中心に議論を起こした。しかし、2004年、2005年と朝青竜が好成績を収めると、日本相撲協会や横綱審議委員会の意見は朝青竜の品格を寛容に受け入れる気運が高まった。横綱昇進後も、その圧倒的な強さを世間に示すと、品格に関連する批判も減り、朝青竜自体への批判ではなく、日本人力士に対する「ふがいない」「奮起せよ」といたった批判へとシフトしたのである。ここから読み解けることは、大相撲に関連する「日本人種」言説である。つまり、大相撲におけるメディア報道では、「日本人」と「外国人」という線引きが存在し、外国人と区別した「日本人種」が想定されているといえる。

その後、朝青竜が怪我を理由に2006年夏の巡業を休んだにも関わらず、母国モンゴルにてサッカーをしていたことがマスコミに取り上げられたことで、日本相撲協会から2場所出場停止、減俸30%、4ヶ月間の謹慎処分が出された。朝青竜に関するメディア上の言説にも変化が起き、再度「品格」に関連する朝青竜批判の声が高まった。この騒動以降、朝青竜は問題を起こすたびにその「品格」が問われ、2009年に大相撲を引退したのであった。

では、外国人力士と関連して描かれることが圧倒的に多い「品格」とは何なのか。新聞における論調を見ると、大相撲における「品格」は、国技や神事性と関連して、あたかも相撲において古くから受け継がれている伝統であるかのように描かれ、絶対的なものとされているケースが多い。

横綱推薦の内規にも、その第一項目に、「横綱に推薦する力士は品格、力量が抜群であること」が記されていることから、横綱において品格が重要視されていることが理解できる。事実、横綱に欠かせない要素として、「品格がある」、「相撲が美しい」、「責任感がある」という抽象的な事象が重要視されているのである57)。しかし、横綱に必要

57)『朝日新聞』朝刊2010年11月20日の「横綱に欠かせない要素」(選択式複数回答)調査結果は、1位「品格がある」53%、2位「相撲が美しい」39%、3位「優勝回数が多い」35%、4位「責任感がある」35%、5位「勝ち星が多い」33%であり、大相撲において品格といった抽象的な基準が見ている側にとって重要視されていることがわかる。

な「品格」が何であるかが明記されているわけではなく、その基準は明確なものではない。また、大相撲が国技とされる以前の明治時代の力士は、品格を問題視され引退した朝青竜とは比べ物にならないほど自由奔放なものであり、大相撲が日本の国技とされてから「品格」というものが重要視されるようになった。メディアの報道においては、外国人力士の登場以降この「品格」が殊更に強調されているのである[58)]。

では、日本相撲協会が横綱推薦の内規(1958年～)として要求することは何なのか。(1)横綱に推薦する力士は品格、力量が抜群であること、(2)今後の横綱推薦に対して、横綱審議委員会は大会で二連続優勝した力士を横綱に推薦することを原則とする。(3)第二項に準ずる好成績を上げた力士を推薦する場合は、全委員の3分の2以上の決議を必要とする。(4)横綱が下の各校に該当する場合、横綱審議委員会はその横綱をよく調査して、全委員の3分の2以上の決議により、激励、注意、引退勧告をなす。(5)休場の多い場合、(6)横綱としての体面を汚す場合、(7)横綱として非常に不成績であり、そのくらいに堪えないと認めた場合である[59)]。横綱推薦の内規から読み取れるのは、「品格」とは、関係者や観客たちが「大相撲」に対し、また「力士」に対して期待している「らしさ」の漠然とした集合体であり、具体的な内容はひどく曖昧であるばかりか、時により人によって一致しているとも限らないということである。刑事責任を問われかねないような暴挙は論外として、土俵上の振る舞いについていえば、例えば「ガッツポーズ」に類する一見同じような振る舞いが、「敢闘精神の発露」と賞されることもある一方で、「抑制を欠き品格に欠ける振舞い」として指弾されていることもある[60)]。これまで「品格」の基準は明確には定義・明文化されてはこなかったが、大相撲における「品格」は、日本相撲協会、横綱審議員会により作りだされた、一種の創られた伝統と「日本人らしさ」を補填するものであると解釈することができる。そし

---

58) 明治期の相撲に関して詳しくは、風見明(2002)『相撲国技となる』大修館書店、pp.34-56を参照されたい。

59) 日本相撲協会HP http://www.sumo.or.jp/ 参照.

60) 前掲書『相撲の歴史』pp.58-63.

て外国人力士とリンクして「品格」が語られることを通じて、国技大相撲において「日本人の求める日本人らしい力士」を作りだし、受け入れるための装置、あるいは外国人を排斥するための装置として「品格」が作用している。また、国技相撲において、競技力とは別の指標で測られる外国人に対する日本人の優位性を提示するものであると読み解くことができる。大相撲、ひいては日本社会に存在する日本人の偏狭なナショナリズムである。そして、海外の人々には理解しがたい、「品格」にそぐわない外国人横綱朝青竜は、「日本の伝統を踏みにじった」とマスコミの標的となり、引退したのであった。

Ⅵ. 終わりに

本稿で検討してきたように、メディアにおける大相撲の外国人力士の言説をみると、外国人力士の受け入れはこれまで「日本的な価値観」を注入し、「日本人として同化」するという形で行われてきた。そこには日本人への同化、日本人の求める力士像への同化が評価されると同時に、「品格」という抽象的で曖昧な基準により、日本人とは異なる「他者」として外国人力士が描かれ、日本の伝統、国技大相撲を壊す者として外国人力士が描かれるケースも見られた。

その一方で、外国人力士という存在は、メディアにおいて大相撲におけるナショナルなものとリンクして語られることを通じて、社会に対してナショナルなものを強調する存在でもあった。つまり、1990年代に起きた「外国人横綱不要論」に始まり、「横綱の品格問題」など、異質な他者である外国人力士は、日本人種とは異なる他者であるからこそ比較の対象となり得たのである。そして、この日本人ではない他者が必死になってナショナルな日本の国技大相撲を体得、体現しようとする姿は、日本人が優越性を持って外国人力士を受け入れるという姿勢とつながった。

この日本社会から外国人力士へ対する眼差しには、時代と力士の置かれた環境、性格、社会状況により変化が見られた。そこには、国技大相撲における外国人力士に対する優越的な視線や、その優越性の崩

壊に反発するナショナルな抵抗が存在し、この背景には閉鎖的で同質性の強調される日本社会の特徴や、大相撲において「品格」、「伝統」を理由に「日本人」と「外国人」が区別されていたことがある。そして、この論調はメディアにおいて殊更に強調され、全国に流布したのである。

今後の課題としては、外国人力士が社会にどのように受け入れられていたのかを、より当時の社会情勢と関連づけて分析を進めていく必要がある。とりわけなぜ1990年代に外国人力士に対する排外的な言説が出たのかを詳細に分析するために、日本相撲協会の歴史と、閉鎖性、政治性、保守性に関しても機関紙を中心に分析を進めていくと同時に、当時日本が起これていた国際情勢と、当時の日本人の意識を、世論調査などを通じて分析する必要がある。

参考文献

阿部潔(2001)『彷徨えるナショナリズム』世界思想社、pp.125-136.

荒井太郎(2008)『歴史ポケットスポーツ新聞　相撲』大空出版、pp.45-53.

生沼芳弘(1994)『相撲社会の研究』不昧堂出版、pp.34-48.

エリック・ホブズボウム、テレス・レンジャー編 前川啓二他訳(1992)『創られた伝統』紀伊国屋書店、p.25、p.407.

風見明(2002)『相撲国技となる』大修館書店、pp.34-56.

児島襄(1992)「「外人横綱」は要らない」『文芸春秋』4月号、pp.372-378.

小錦八十吉(1988)「外人が横綱になってどこが悪い人種差別、ワラ人形。土俵の外に強敵がいた」『文芸春秋』4月号、pp.318－323.

坂上康博(2001)『スポーツと政治』山川出版社、pp.34-46.

高津勝(2008)『スポーツ社会学の可能性』創文企、p.141.

高見山大五郎・小錦八十吉・ロバート・ホワティング(1984)「ジェシーとサリー」『Number』6月号、pp.18-23.

出羽海智敬(1992)「相撲には相撲の流儀がある日本の伝統を守るのに誰に遠慮がいるのか」『文芸春秋』8月号、pp.298-306.

中島隆信(2008)『大相撲の経済学』筑摩書房、pp.78-85.

新田一郎(2010)『相撲の歴史』講談社、pp.58-63.

長谷川明(2002)『相撲の誕生〈定本〉』青弓社、pp.65-89.

武藤泰明(2012)『大相撲のマネジメント』東洋経済新報社、pp.1-215.

和歌森太郎(2003)『相撲今むかし』隅田川文庫、pp.23-26.

『朝日新聞』1964年3月5日、1968年1月6日、1972年7月17日、1978年1月14日、1982年7月17日、1984年7月9日、1984年9月24日、1987年5月22日、1987年5月25日、

1987年5月28日、1989年11月27日、1989年11月29日、1990年6月12日、1992年4月24日、1999年1月25日、2000年1月29日、2000年8月22日、2004年11月30日、2005年9月26日、2006年9月29日、2009年5月26日、2010年3月20日、2010年11月20日付.
『日本経済新聞』1992年4月20日付.
『毎日新聞』1950年1月29日付。
『読売新聞』1968年10月10日、1972年7月17日、1984年9月24日、1984年9月25日、1984年10月1日付.
外務省HP http://www.mofa.go.jp/mofaj/
日本相撲協会HP http://www.sumo.or.jp/

성 명(한 글) : 권 학 준
(한 자) : 権 学 俊
(영 문) : Kwon, Hak-Jun
논문영어제목 : A Study on the Acceptance and the Resistance of Heterogeneous Strangers in the Japanese Society : Focused on Foreign Sumo Wrestlers
소 속 : 立命館大学 産業社会学部 現代社会学科 准教授
E-mail : Kwon@ss.ritsumei.ac.jp

성 명(한 글) : 다케다 유키
(한 자) : 武田 悠希
(영 문) : Takeda, Yuki
소 속 : 立命館大学 産業社会学部 現代社会学科卒業
E-mail : takeyou114@gmail.com

투 고 일 : 2014년 1월 7일
심사개시일 : 2014년 1월 13일
심사완료일 : 2014년 2월 4일